

【研究発表④】

杜 絡嘉（関西大学大学院） 「古義堂と僧侶 ー伊藤東涯・蘭嶋の日記類資料を手がかりにー」

伊藤仁斎（1627-1705）によって設立された私塾、古義堂は、明治初年までに多くの弟子を指導し、日本近世教育史において重要な位置を占めている。そういう古義堂については、これまで多くの学者により注目を集め、多くの優れた先行研究が行われてきた。ただし、古義堂と僧侶との交流についてはあまり重視されていない状況である。古義堂と仏教の関係に関する研究では、主に二つの先行研究が確認される。まず、三宅正彦の『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』（思文閣出版、1987年）が挙げられ、この書の第2章では、伊藤家の先祖における浄土信仰と坐禅の影響が指摘されている。また、同書の第5章では、仁斎の初期思想における仏教的思考が検討され、第7章では思想形成期の仁斎における仏教の受容を論じられている。もう一つは、大谷雅夫の「曼殊院良応法親王と伊藤仁斎・東涯」（京都大学文学部国語学国文学研究室編『国語国文』5151-2、1982年）である。この研究では、元禄年間における曼殊院良応法親王と伊藤仁斎・東涯との交流が中心に取り上げられ、そのやり取りの内容が詳細に論じられている。両研究は素晴らしいものでありながら、まだ未検討の領域が残されていると考えられる。そこで、本発表では、古義堂と僧侶との交流に焦点を当て、そのやり取りの内容および影響を論じたい。実際のところ、これまでの古義堂のイメージとは異なり、仁斎時代の未から、古義堂は僧侶たちと積極的に交流し、数多くの僧侶が入門した。こうした僧侶との交流は古義堂に対してどのような影響をもたらしたことは本発表の問題関心である。使用する主な史料は、東涯自筆の『伊藤氏家乗』などの日記類史料、そしてこれまでほとんど使われていなかった仁斎末子蘭嶋の『抱鄴齋日乗』である。本発表はこれらの史料を用いて、これまでの古義堂のイメージとやや異なる、つまり僧侶たちと積極的に交流する古義堂像を提示するものと思われる。